



関西学院にとっての聖和史③

大阪のランバス女学院

原 真 和

(聖和短期大学教授、聖和史編纂委員会委員長)

1886年10月、砂本貞吉(1856-1938)は、私塾広島女学会(後の広島女学校、現広島女学院)を始めました。1887年10月、ケンタッキー州出身のナニー・B・ゲーンズ(Ann Elizabeth Gaines, a. k. a. Nannie Bett Gaines, 1860-1932, 写真)が着任、1889年9月、広島女学校の初代校長に就任しました。ゲーンズ校長のもとで、1891年、小学校と幼稚園が開設され、1895年4月、保姆養成科が発足しました。

この間、日本政府は、大日本帝国憲法を公布(1889年)、当時の欧米諸国をモデルとして、帝国主義政策を推し進めました。日本史の上では、日清戦争(1894年)、日露戦争(1904年)、韓国併合(1910年)等がありました。その間、日本と世界の経済規模は、拡大しました。

20世紀に入り、大正時代(1912年が大正元年)を迎え、広島女学校においても、生徒数が増え、校地も大きくなり、新しい校舎が順次、建設されました。そのような中で、専門学校を増設する案が話題に上るようになりました。

1918年、ゲーンズは、いくつかの問題の検討を南メソヂスト監督教会日本宣教部とW・R・ランバス監督(Walter Russell Lambuth, 1854-1921)に依頼しました。その中に広島女学校の再編問題が含まれていました。この問題は、1919年8月の宣教会議で取り上げられ、「広島女学校、ランバス記念伝道女学校に関する委員会」を設置して、検討することになりました。委員として、W・A・ウィルソン、N・B・ゲーンズ、A・B・ウィリアムズ、S・H・ウェンライト、J・C・C・ニュートンが任命されました。

1919年11月4日、神戸のパルモア学院で開かれた南メソヂスト監督教会日本宣教部年会で、上記の委員会の案が上程されました。その中には、広島女学校保姆師範科と神戸のランバス記念伝道女学校を合同させ、クリスチャン・ワーカー養成のための新しい高等教育機関を大阪に設置することと、広島女学校により高度の学部を加えることが含まれていました。保姆師範科と伝道女学校の合併が考えられた背景には、両校の卒業生は同じ現場で働くことが多いので、保姆師範科の学生は伝道の精神を養い、伝道女学校の学生は教育の基礎を学び、お互いの友情を育て、将来助け合うようになってほしいという期待がありました。これらの案は、多少の修正の後、承認され、年会は終了しました。ランバス監督は、喜びと期待を表しました。

ゲーンズは、上記の委員会のメンバーでしたが、専門学校を増設には消極的でした。その背景には、学校の成功に比較して、地方への伝道が遅れているという認識がありました。在校中に信仰を持ち、洗礼を受けたけれども、卒業した後は、教会はおろか、一人のクリスチャンと出会うこともない地方に帰っていかねばならなかった生徒たちがいました。ゲーンズには、学校の更なる充実よりも、地方伝道を進めることのほうが、優先されるべき課題であるという認識がありました。

しかし、広島に戻った彼女は、間もなくして、県と市から、英語、家政、音楽の教師養成のための高等専門学部の開設を検討してほしいという要請を受け取ったのです。彼女は、この要請を、大きな驚きと喜びをもって受け取り、神戸の決定に従って、動き出しました。60歳を目前にしていた彼女は、1920年4月、名誉校長となり、S・A・スチュアート牧師が広島女学校第二代校長に就任しました。結局、スチュアート校長のもとで、家事科と英文科から成る専門部ができました。

広島女学校再編問題については、当初、神戸のランバス記念伝道女学校を広島に移して、広島女学校の保姆師範科と共に、同校に新しい専門部を設置する案が検討されました。そのとき、最初はゲーンズだけが、その案に反対し、新しいクリスチャン・ワーカーの養成学校を大阪に置くべきであると主張したのです。大阪のほうが広島より社会事業の現場が数多くありました。加えて、広島は免許や認可を重視する傾向が強かったのに対して、大阪は実習生を免許がなくても働き手として歓迎する傾向が強かったのです。実習は、教室で学べないことを学ぶ必須の科目です。ゲーンズには、実習の重要性についての深い認識があったのです。

他方、ゲーンズは、保姆師範科を特別愛していました。「他のどの科よりも多くの愛をもって手塩にかけた科で、おそらく広島女学校を日本の他のいかなる学校とも区別する特色ある養成科だった」と述べています(サムエル・M・ヒルバーン著、佐々木翠訳『ゲーンズ先生』広島女学院、2002年。原著は1936年刊)。彼女にとって、保姆師範科が大阪に移ったことは、感情的には大きな悲しみでした。



さて、1919年11月4日の神戸での年会の決定に引き続いて、新設されるクリスチャン・ワーカーの養成

学校の設立準備委員会が直ちに発足しました。メンバーは、J・T・マイヤーズ、W・R・ウィックリー、M・M・クック、A・B・ウィリアムズ、C・ハランド、K・ハッチャーで、大阪の両国橋教会の釘宮辰生牧師の牧師館に事務所が置かれました。

校地として選ばれた土地は、大阪市東区東高津南町 127 番地の 322 坪余とその隣接地、南区石ヶ辻町 5290 番地の 868 坪余、合計約 1191 坪でした。(後に、両方合わせて、大阪市天王寺区石ヶ辻町 5290 番地と称されるようになりました。)この土地は、上本町六丁目(通称「上六」)の近鉄(当時は大阪電気軌道)のターミナルに近く、交通が至便である上、比較的高燥な土地で、煤煙の少ない所でした。また、大原社会問題研究所が近くがあり、自由に利用してよいという許可も得ることができました。(大原社会問題研究所は、1937 年に東京に移転、現在は法政大学大原社会問題研究所となっています。)

この土地は、歯ブラシ工場があったところで、木造二階建ての工場が一棟(54 坪)と木造二階建ての離れが二棟(45 坪と 10 坪)ありました。当面は、工場だった建物の一階を教室、二階を寄宿舎とし、離れを宣教師館とすることにしました。建物の都合により、当面は、保育専修部のみの授業をこの校地で行ない、神学部は、新校舎が完成するまでの間、神戸で授業を続けることになりました。1921 年 2 月 21 日付けで、J・T・マイヤーズを設立者として、私立学校認可申請を大阪府知事宛てに提出しましたが、このような事情があったため、学校の名称を「ランバス女学院保育専修部」としました。この名称は、ランバス記念伝道女学校に由来し、W・R・ランバスの母、メアリー・ランバス(Mary Isabella Lambuth, 1832-1904)を記念するものと考えられます。同年 4 月の開校時の専任教授は、広島女学校保姆師範科から来たクック、ハッチャー、ニューカム の 3 名、学生は、同じく広島の保姆師範科の 1 年次を終えた 2 年生 3 名。これに、26 名の応募者の中から合格した 18 名の 1 年生が加わりました。入学試験の科目は、幾何、代数、理科、国語、作文でした。学校は 1921 年 4 月 29 日付けで認可されました。この年の 9 月 26 日、W・R・ランバス監督は、横浜万国病院で亡くなりました。

1922 年 1 月には児童相談所を開設、2 月に幼稚園設立が認可され、4 月には幼稚園の入園式を行なっています。そして、いよいよ、新校舎の建設が始まりました。その間、授業は両国橋教会(西区靱町北通)で行ない、学生と教師の寄宿舎はウエルミナ女学校(現大阪女学院)の旧寄宿舎(東区仁右エ門町)とプール女学校(現プール学院)の寄宿舎(生野区勝山通 5844 番地)を使わせてもらいました。幼稚園は 9 月から休園となりました。(希望者には福島愛輝幼稚園を紹介。)同年 10 月 4 日、新校舎の鋳入れ式が行なわれました。

同年、すなわち 1922 年、前年 9 月に亡くなった W・R・ランバスの誕生日である 11 月 10 日に、ウエルミナ女学校同窓会館において、学校記念日の礼拝を行ない、ランバス監督を追想し、彼の誕生日を学校の創立記念日としました。この礼拝で朗読された聖書の箇所は、フィリピの信徒への手紙 4 章 4-9 節でした。

1923 年 2 月 10 日、新校舎の竣工を前にして、校名を「ランバス女学院保育専修部」から「ランバス女学院」に変更する申請書を提出しました。同年 3 月 27 日、第 1 回卒業式が、神戸中央教会(現神戸栄光教会)で行なわれ、神戸の神学部の 8 名と大阪の保育専修部の 3 名が卒業しました。

同年、すなわち 1923 年 5 月、待望の新校舎が完成、同月 10 日より、神学部と保育専修部が同じ校舎で学ぶことになりました。新校舎は、鉄筋コンクリート造り、地下 1 階、地上 4 階建ての「コ」の字形の建物で、建坪 245 坪余、延床 873 坪余、全館暖房給湯設備、水洗トイレを備えていました。この建物に、ランバス女学院、附属幼稚園、寄宿舎、宣教師住宅等が収まっています。土地代 105,000 円、建築費 180,000 円を含む総額 305,000 円の費用は、南メソヂスト監督教会伝道局の寄付金によって賄われました。その大部分は、同伝道局婦人部の献金でした。1924 年 1 月 19 日に献堂式が行なわれました。この建物の正面には、「LAMBUTH TRAINING SCHOOL FOR CHRISTIAN WORKERS」の文字が大きく刻まれていました。

1941 年、ランバス女学院は、このキャンパスを失うこととなります。同年、西宮の神戸女子神学校と合併、神戸女子神学校は聖和女子学院に名称変更、ランバス女学院は廃校となりました。後の聖和大学のスクール・モットー“All for Christ”は、ランバス女学院のスクール・モットーです。“HEAD, HEART, HAND”は、広島女学校保姆師範科に由来します。聖和大学は、登記上継続する神戸女子神学校がその創立の年としていた 1880 年を創立の年としました。

【訂正】

『学院史編纂室便り』No. 33 (2011 年 6 月 10 日発行)

7 ページ、上から 2 行目、「5,280 坪余」とあるところは、「約 1,000 坪」の誤りでした。お詫びして、訂正いたします。

